

内 容

- 鳥の渡りを追う
- 渡り鳥の減少要因を探る
- 人と人をつなぐ渡り鳥

● 渡り鳥の減少要因を探る

環境改変

開発が進んだ東京湾沿岸域



環境改変

- 里山の環境改変

宅地造成などによる山林伐採

近代化にともなう水田構造の変化

高齢化にともなう稲作・水田放棄



生息地や食物の減少→個体数の減少



参考文献→Fujita et al. (2015) Landscape and Ecological Engineering 11: 189-198



スマトラにおける熱帯雨林の減少過程



越冬地、東南アジアでの広範囲にわたる環境改変

アブラヤシの大規模農園



Photo: Lilik Budi Prasetyo

風力発電施設との衝突



北海道西北部沿岸

中国黄河河口沿岸

越冬地や中継地での密猟

フィリピンのルソン島北部では、数年前まで、毎年少なくとも3,500～5,000羽のサシバが密猟されていた。

保護団体、研究者、地元行政などが連携して保全に向けていろいろな活動を展開した結果、密猟を根絶することに成功。

しかし、他地域での状況は不明。今後の活動の展開が重要。



カガヤン州立大学での調査中に運び込まれた、使途不明なサシバ

越冬地・フィリピン 2年間で密猟を根絶した ルソン島北部の町

文・山崎 亨
（アジア猛禽ネットワーク会長）

【ゆまぎみ・トリス】
馬尼ラ大学農学専攻卒業後、連邦大学教育学専攻で博士号取得後、環境生態学専攻で15年間のイタワシ・タマシカなどの研究と自然環境保全に取り組む。1999年にアジア猛禽ネットワークを設立、アジア各国で環境保全と一歩となった猛禽の保護と繁殖活動を行っている。

サシバの越冬地であるフィリピンでは、長く続いていた密猟を根絶する動きが活発になっていきます。2年という短期間で密猟をなくすことができた、ルソン島北部のある地域の成功例を紹介します。

サシバを守る「ネットワーク」

フィリピンにおけるサシバの生息環境

サシバがフィリピンに渡ることには知られていますが、その実態は数年前まではほとんど不明であった。「アジア猛禽ネットワーク（ARRCN）」（英語）による東南アジアにおける猛禽類の渡り共同調査（2012年～13年）の結果、フィリピンのルソン島北部には、春にサシバが最も多く集結することがわかった。

ARRCNのフィリピンメンバーが地元の大木と共同で、2016年の春に猛禽類の渡りを継続調査した結果、毎年、約3万8千羽のサシバが集結し、北方に渡ることが明らかになった。秋ではなく、春にこれほど多くのサシバが集結する理由は、この時期にココヤシ林で大発生する大型のコガネムシを捕食するためであった。つまり、北方に渡っていく前に十分な栄養を蓄えるため、ココヤシ林が広がるルソン島北部に数多くのサシバが集結していたのである。

毎年5千羽ともいわれる密猟

ところがサシバの捕食場所やねぐら場所でもあるココヤシ林は、住民によるサシバの密猟場所でもあった。地元住民へのヒアリングにより、毎年、少なくとも3千500羽から5千羽ものサシバが密猟されていることが判明したのだ。日本

で、渡り時期に確認されるサシバの数がせいぜい2万羽程度であることを思うと、いかに多数のサシバが毎年殺戮され続けていたかがわかる。

現在、私たちが2016年に現地に行っていた際には、ココヤシ林のわぐら場所付近で銃を持つてうろつく数多くの密猟者を発見した。

現在はココア・ガイヤンをしてもらっている元密猟者にその実態を尋ねたところ、次のような回答があった。

- 密猟グループはコミュニティ単位で結成される
- グループは3～5名で構成され、3つの役割（ライントレーサー・射撃・回収）を担う
- 密猟の実施時間は、19時から翌早朝の3時までの8時間
- 1グループの捕殺数の最大は、一晩に75羽だった
- 密猟の実施時期は3～4月だが、時には5月に行なうこともある
- 捕殺したサシバは冷凍庫に保管し、1羽あたり50ペソ（約100円）で売れるが、近年高くなりつつある
- サシバはタレを浸けて焼かれ、娯楽として売られる

密猟をやめたいという密猟者たち

私たちは、サシバの密猟が明らかに



香港の生鮮市場で売られるシマアオジの炙り焼き。
撮影:シンバ・チャン

● 人と人をつなぐ渡り鳥

鳥たちに国境はない。鳥はビザもパスポートももたずに、
いくつもの国を越えて渡っていく。

渡り鳥は、遠く離れた国や地域の自然と自然をつないで
いる。

一方、渡り鳥は、遠く離れた国や地域の人と人をもつないで
いる。

世界の各地で、渡り鳥を介した人と人とのさまざまな交流、
保全に向けてのいろいろな国際協力が行なわれている。



バリ島、インドネシア

保全をめぐる、各地で熱い議論がかわされる



ロシア、モスクワ

会議のあとにも交流が続く

安曇野、長野



マレーシア・タイピン

慶應大・鳥の渡り衛星追跡公開プロジェクト

<http://hachi.sfc.keio.ac.jp/>

ハチクマの渡り



★2012年秋から2013年夏、
4羽のハチクマを衛星追跡。追跡状況を
リアルタイムで一般公開。

★情報は、日本語、英語、中国語、
韓国語、インドネシア語の5か国語で発信。

★東アジアを中心に、世界中の人々がアクセス。推定で、延べ
10万人ほどの人が参加。感想、意見、情報交換などを行なう。



まさに、遠く離れた国や地域の人と人が
鳥の渡りを通してつながったのだった。

現在進行中、スワンププロジェクト

<https://www.intelinkgo.com/swaneyes/jp/>



● まとめと課題

● 生息地の具体的なつながりを明らかにすることは、対象種の保全や温暖化の影響などを考える上で重要。

● 異なる国や地域の自然と自然は、鳥の渡りによって、さまざまな形でつながっている。各地の自然あるいは生態系は、渡り鳥によって、**網目状のネットワーク**を構成していると言える。

● 個々の自然は、それぞれ孤立して存在しているわけではない。自然環境を保全する上では、**地域の視点**と**地球規模での視点**の両方をもつ必要がある。

● **渡り鳥に国境はない**。鳥は、渡りを通じて、遠く離れた国や地域の人と人をもつないでいる。人と人の心をつないでいる、とも言える。

● 渡り鳥とその生息環境の保全には、**国際協力が不可欠**。

よりくわしく知りたい方は
『鳥たちの旅』を。

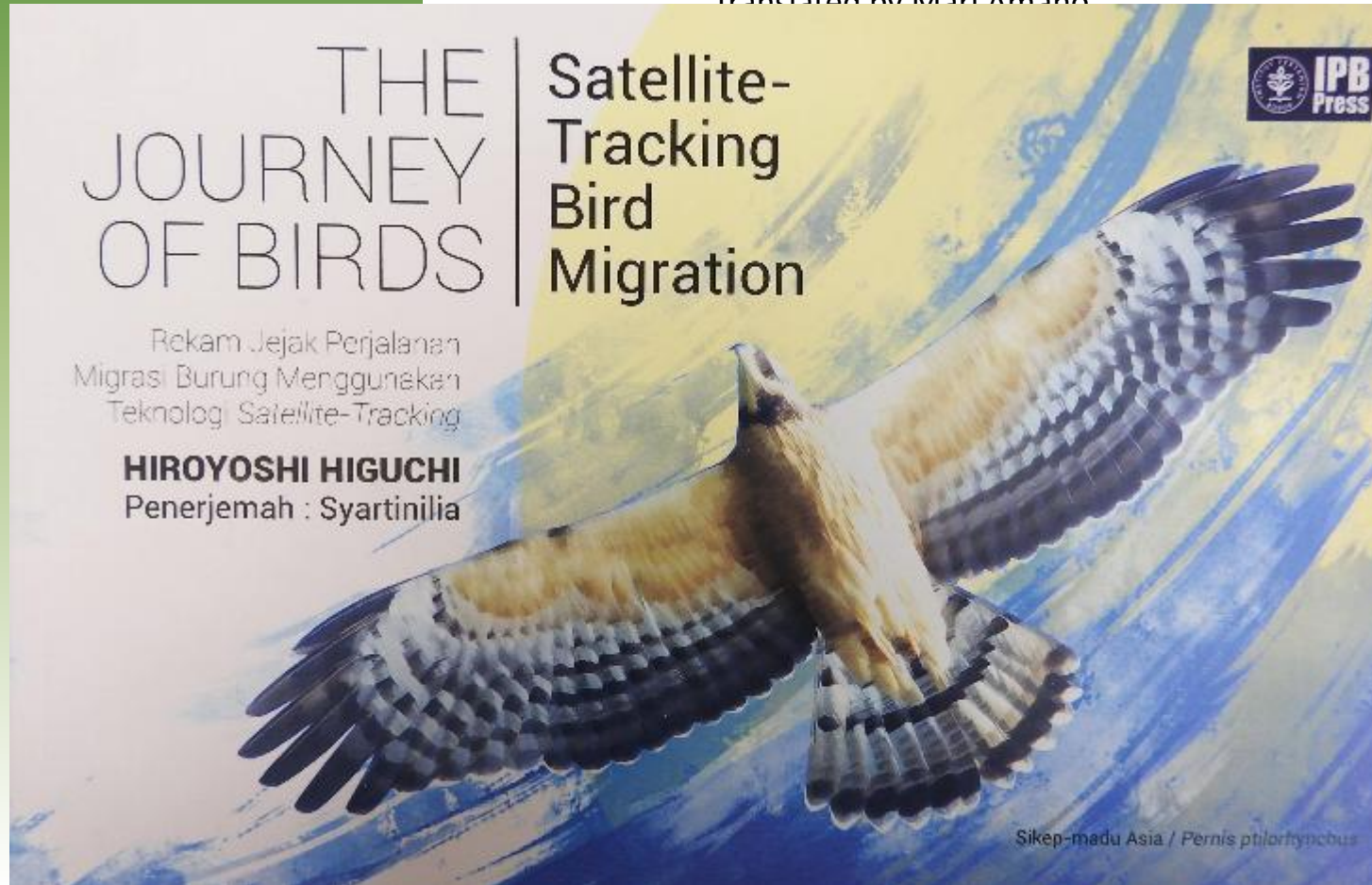
樋口広芳著、NHK出版発行
2005年9月刊

The Journey of Birds

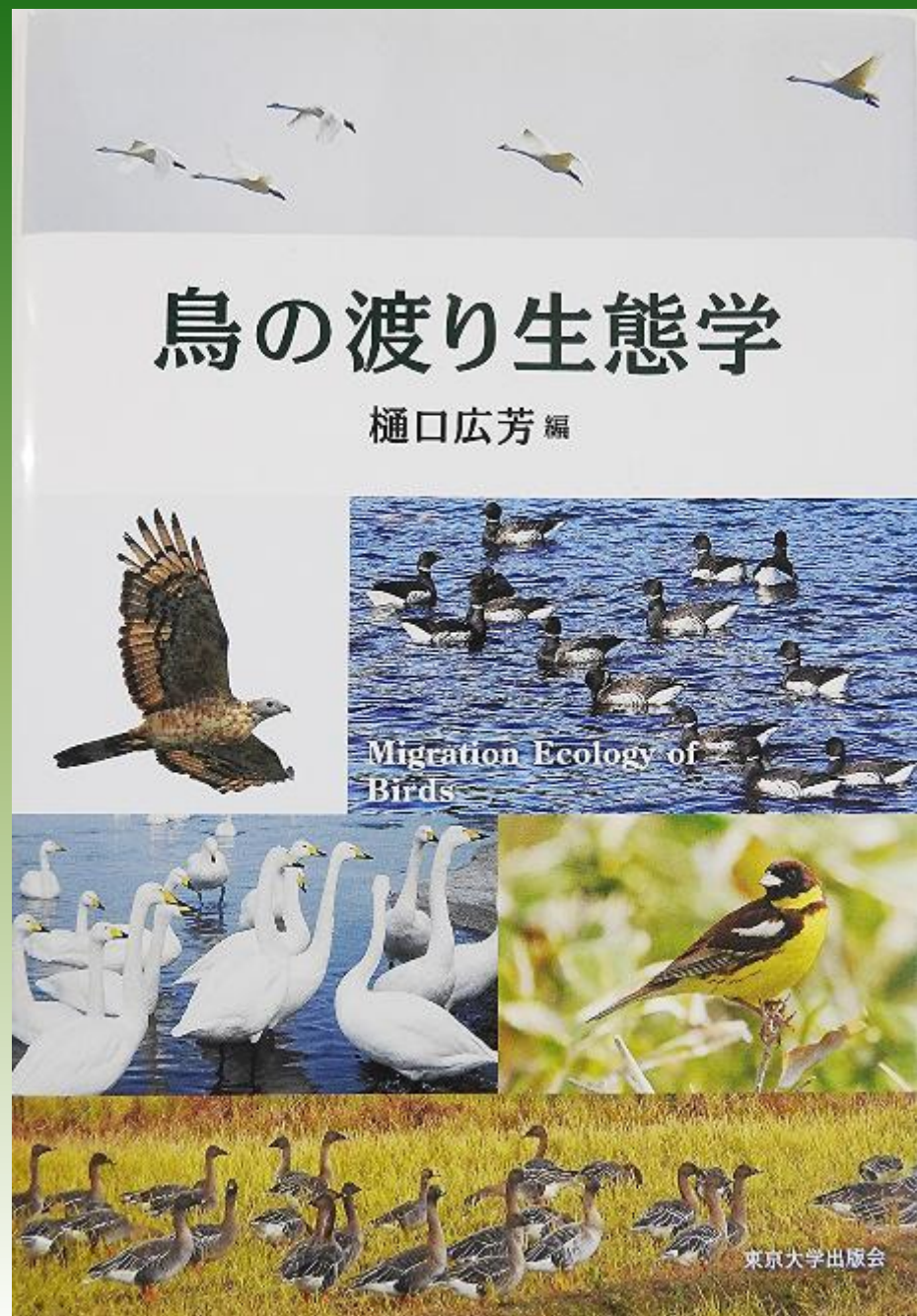
—Satellite-tracking Bird Migration—

HIROYOSHI HIGUCHI

Translated by Mari Amano



樋口広芳 編著
東京大学出版会
2021年発行
定価 5500円(税別)



新刊！

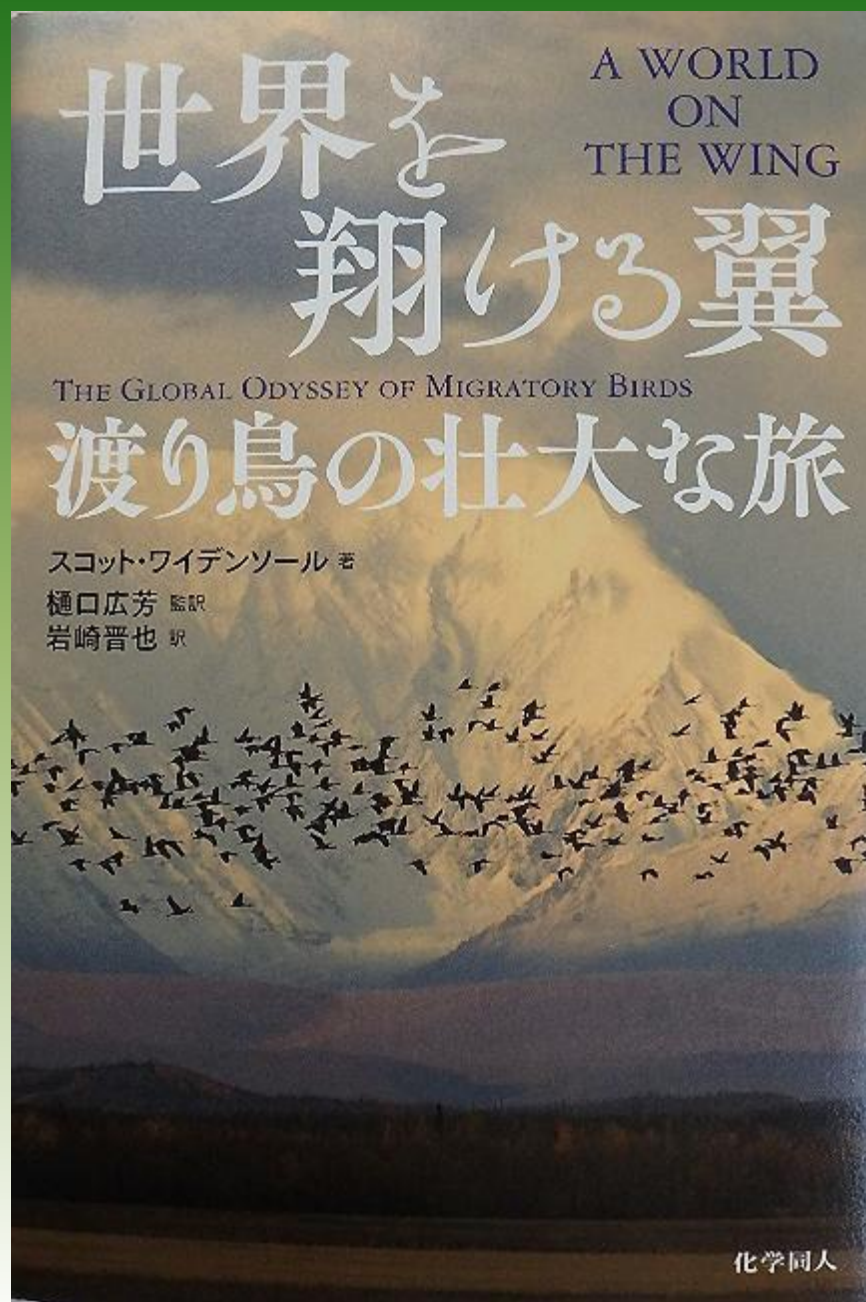
スコット・ワイデンソール 著

樋口広芳・監訳

岩崎晋也・訳

化学同人、2023年刊

定価 3,800円(税別)



Thank you !

